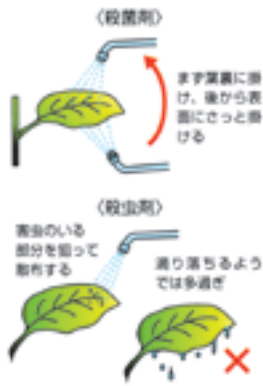


病害虫の防除と 農菜の上手な使い方



薬剤別のポイント



作物別のポイント



病害虫の発生を抑え、健全な野菜を育てるために必要な事項は、(1)病害虫の発生源、感染源を少なくする(2)これらの生育場所となる周辺雑草を退治し、野菜の残りかすを丁寧始末する。(3)病害虫を受けない。(4)病害虫の感染、飛来を、資材や混・間作、輪栽で回避する(5)防虫ネットやべた掛け資材被覆、反射フィルムの利用、麦や陸稲を間作して障壁を作る。対抗植物との輪栽(ネマトーダにマリーゴールド、エン麦、ハブ草)、コンパニオンプランツ、共栄植物

との近接栽植(トマト、ニラ、ウリ類とネギ)などによる対応。(4)被害の早期発見に努め、機を逸しないうで有効な農薬を上手に散布する、などです。農薬を有効に利用するに当たって大切なことは、病害虫は畑全体に一齐に出るものではなく、初めは部分的に、特定の株や部位に出て、それが何日かすると急に広がってくるので、初期発生の発見に努め、この段階でいち早く局所を重点的に薬剤散布することが肝心です。そうすることによって薬剤の使用回数、量を大幅に節減することが可能です。

発生した病害虫の種類をよく調べ、あるいは専門技術者に判定してもらい、適正な薬剤を求めますが、薬剤により作物ごとの使用濃度、使用可能な回数、収穫の何日前まで使用できるか、他剤との混用の可否などが異なるので、説明書をよく読んで、間違えないよう、十分注意して使用してください。水和剤、乳剤は必要な水量に薬剤を入れ、展着剤を加え、よく攪拌(かくはん)して用います。必要量は野菜の種類、生育段階により大きく異なりますが、生育盛りのキュウリ、トマトでは1株当たり100〜200ml、キャベツ、ハクサイでは約30〜50mlぐらいと考えてよいでしょう。散布に当たっては噴霧機の圧力を十分にかけ、害虫では寄生部、病害では病斑が出現しているところ、雨により土がはね上がりやすい下葉の裏などを

重点的に掛けます。初め噴霧口を上向きにして下葉の裏に掛け、次第に上葉に向かい、最後に全体の葉の表面にさっと掛けて仕上げります。細かい霧が葉の全面に付くのがよく、滴り落ちるのは多過ぎて細部によく附着しません。

板木技術士事務所
●板木利隆

「JA版農業電子図書館を」つかってみよう!!

当JAでは、病害虫や雑草、農業など生産に関する情報が簡単に検索できる、タッチパネル式の情報端末「JA版農業電子図書館」を窓口相談機能の充実と、迅速な指導や最新情報の提供等、組合員サービスの向上を図るため、営農施設に設置しています。

皆様のご利用をお待ちしております。

*設置店舗：総合営農経済センター
片貝営農センター
千田園芸資材センター



病害虫・雑草診断など簡単に操作できます!!
探したい項目を指でタッチ!!